

第3回大台町地方創生会議 議事録

日時：平成27年8月6日（木） 9:30～11:30

場所：大台町役場 2階会議室

副町長 挨拶

総合戦略につきましては、6月15日から25日まで町内6カ所をまわりまして説明会を開催し、地域の方々のご意見もいただきました。また役場の若手職員で4つのワーキンググループをつくり、ワーキング独自で地域の方々にお話しを聞いたりしながら総合戦略の内容について検討をしてきました。その途中では西村座長にも参加いただいたこともございました。時間的な問題もあって、本日は具体的などころまでは出せませんが、現在できている総合戦略の案として提示させていただいた内容に対して、委員のみなさまからは忌憚のないご意見をいただきたいと思っております。

西村座長

今、いろんな地域の地方創生の取組を見させていただいて、すごくいい雰囲気である。各市町が自分たちの町をもう一回見直そう、自分たちの地域を知ろうという意識が着いてきたのではないかと。知れば知るほど自分たちの町のよさがわかってくるし、足りないところもわかってくる。その上で誇りを持つという気持ちがだいぶ出てきている。そうすると、それに向かっただ戦略というか、それが具体化してくる、という印象を持ちながらこの2～3ヶ月過ごしている。今日は、第3回の大台町地方創生会議で、皆様方からの意見が非常に参考になるということで、私も先日役場の若手職員のワーキングに参加させていただいて、皆さん地域のかなり具体的なことを考えている。ただし、どこに絞ったらいんだらう、と悩んでいるようにも見受けられた。今日は、ワーキングの中間報告ということで、完全なものではないが、この町に住んでいるみなさんのそれぞれの立場からの思いや感じたことを語っていただければと思います。

では、事務局より説明を御願いたします。

事務局 資料説明

西村座長

ありがとうございました。

だいぶ具体的な内容も出てきている。基本目標とそれに対する基本的方向と各部会の作業方針について、かなり整理ができてきたなという印象。大台町の考える方向は整理されてきたと思う。ここに具体的な施策、かなり短期的なものから長期的なものまで含めて、

具体的なものもあるが、まだこれは確定されたものではなくて、これらを「たたき台」として、産業界の方からみたら「いやいやそうではなくて、こういう見方もあるよ」とか。なにかが無いと語れないと思っていたので、あくまでも基本の方針に対応して各施策などは例示のような形で見えていくので良いのではないかと。すると、この4つの領域にわたって、それぞれの委員の得意分野があらうかと思えます。またそこだけに限らず、一人一人にお話しをうかがうのが僕のやり方なので、では呉山委員からお願いします。

呉山委員

事前に資料をお送りいただいた中で、社内で検討してきたものがあるのですが、メモにしてきました。

5カ年の目標について読ませて頂いて、とくに力になれるところと言うのは、まず「魅力あるしごとづくり」、地域資源の活用と既存企業との連携で魅力あるしごとづくり、というところに特化して考えてみました。

ここに書いてある、施策 1-1 今以上に魅力あるしごとづくりと、施策 1-2 流通力が大事、というところで、我々から見ると原材料になるのは木材かと思う。施策 1-4 コラボ創生、などを踏まえてわれわれの提案として、大台町の特産の一つである木材について、宮川森林組合などもありますので、コルク材を活用して大台町オリジナルの履き物、下駄、我々の得意分野でもあります。こういったものの開発ができればと思っております。商品を作っていく上で、地元の方からデザインを募集して、昴学園の学生さんや地元のすべての方の公募で、皆さんを巻き込んでできれば、皆さんの愛着心につながるのかなと思う。

なぜこういうものに特化したのかというと、継続する商品が必要であること、夏用の履き物の国内市場は、夏場は素足で履くことも多いのと、オリジナル性が求められることから、みなさんで考えていければと思っている。またこうしたことは毎年続けていかないといけないものかとも思っているし、われわれができるものとしてこれを選びました。また地域の資源の活用である木材についても、地元の木材屋さんのもをつかって、また地域の人材をもってつくる、まさに大台町のものとして創ることができるのではないかと。一つの提案として、われわれは生産加工が得意なものですから、材料は現地の木材を活用して、大台町のロゴをつけて発信することが大事かと思う。近隣の皆様の知恵をいただいて、それがヒトとモノのコラボになるのかと思っている。

新しいビジネスモデルの創造というところで、これをどこにむけて発信していくかというところ、まずは大台町のみなさまになにが魅力のものなのかを知ってもらうこと、そのツールとして、われわれとしては履き物、ふだんからはけるような簡易なものではあるが機能的なはきもの、これをまずは大台町民、そして三重県全域に広げていって、さらに全国に発信することになれば、夢も出てくるのかなと思っている。野菜などですでに大台町のブランドとして出しているものもあるかと思うが、これを商品化してロゴがあればそれを使って、ロゴがなければ町民のアイデアから生まれたものをつけて発信することにも意味が

あるのではないか。こうしたことができれば、メディアの協力もいただき宣伝していただいて、愛着や地元愛に繋げていくことができるのではないか。これが最終的には三重県の商品になっていけば、県の力もはいつてくれれば。外国の方も増えてきており、そういった方にも日本の伝統的な履き物を大台町ブランドとして発信していくことができる。サンプルとして今はコルクでつくっているが、大台町の木材と一緒につくっていったら、と思っている。われわれの得意分野が下駄ということで、下駄だけでなく、大台町を発信していくことが大事なのではないか。

西村座長

すごくいい意見だと思って聞きました。例えば、5年くらいこういうのに集中してもいいと思う。なにか軸をもって、入り口から完結までを仕上げていくという作業を町全体でやることはすごくいいことだ。もうひとつ言えるのは、すべてを企業が背負わなくても役割分担でしていけばいいと思う。軸になる企業は絶対に必要なもので、その意味で呉山コルクさんはいい立ち位置である。

その前にある林業、林業を林業として独立して強化して行って、ここがしっかりとした産業として成り立たない限りは、いくら呉山さんがいてもやはり成り立たない。だから、林業は林業として大台町でしっかり守っていく、つくっていく。デザイン力の強化を町に頼るのではなくて、住民だけではなくて、デザインのできるプロを集めるくらいのことをして、ブランドをつくって「大台下駄」のようなものをつくってはだめなのでしょうか。亀山であれば、「カメヤマローソク」のように。

ブランドというよりは、その地域の代表的な製品群のような形で。そこにいろんなタイプのデザイナーが来て、「大台下駄作家」が集まって、森がしっかり守られて、生産加工ができる、それにのっかるデザイナーたちがそれぞれのブランドをつくっていく、そして町が商社みたいなものをつくってほしい。

大台町を売る、というようなことをして行ってほしい。そうすると、町全体が役割分担をして、材料を守るヒト、生産加工するヒト、デザインをするヒト、という一連の軸ができれば、大台を代表するものができて、その象徴が大台下駄になる。やってみて完全にうまくいかなくてもいい。まず短期的に5年間やってみて、それが2060年には世界から「大台下駄の大台町ですね」と言われるように。

三重県と言わずにフランスから行きましょうよ。というのは、今パリでは日本の刃物がむちゃくちゃうけている。マニアックな人たちが収集していて、同じように「大台下駄」というので戦略的にいくのであれば、これは地域商社ですよ。自分たちの商品を世界に発信するだけではなく押し込んでいくような商社をつくっていく。そうすると一つのモデルができるじゃないですか。それが、足りないモノを埋めて行って、全部をこの町で完結させてひとつものをつくりあげていくことができれば、雇用も確保でき、ブランド化もでき、この地域が永続的になると思う。そう思うので、遠慮せずに「〇〇が足りない」と文句を

言えればいいんじゃないですか。例えば、加工についてはできます、だから原材料についてはもっと強化してくれ、デザイン力を強化してくれ、売ることに対しても強化してくれ、とか。社長、そういうことですよ。

呉山社長

我々は、加工することはできますし、最初からやろうとすればおそらく最初からすべてできると思う。しかし大台町では、町のみなさんと一体になってつくることに重きを置いてやっていくことが重要。プロのデザイナーを入れてやることもある意味近道かとは思いますが、地元の人々の思いを形にする、ということもあるのではないかと。特に昴学園の高校生の感性をとらえて一度形にしてもらおうと面白いのかなと思う。

西村座長

そういう教育コースというか。松阪では、ハンドクリームをつくっていて今 9 作目までできていて、1 億円を売り上げたい。その子たちがそのまま、グループを組んで一番がんばっていた女の子が万協製薬にはいって、20 歳になって商品開発の先頭にたっている。高校生がプロになっていって、こういった地域の〇〇下駄職人のデザイナーがこの町から育っていった、その卵を育てるのが昴学園、というコラボができるのが理想的ですよ。こういった場だから話ができる、というのもある。呉山委員のお話しは大変面白いなと思いました。大台町はこれで軸がきまった、と思った。なにもこれに対して違和感はないですよ。一度まわしていくのもよいのではないかと。

呉山社長

下駄といってもいろんな形のものがある。これはハイヒールかというものもあるし、古典的な落ち着いたものもある。いろんな発想から生まれたものを形にして、というのはおもしろいと思う。

西村座長

大変魅力的です。是非とも落とし込みましょう。

副町長

具体的なことは改めて。ロゴマークというのでは、今ユネスコエコパークというのがあって、このロゴも使えるので。林業とユネスコエコパークが売りになっていくのかな、と思っている。

西村座長

木材の環境認証というとヨーロッパではすごくいいですね。そういうものを徹底的に

やってしまう。ただ企業一社だけでやるのは大変なので、それを町ぐるみの取組としていく。

副町長

今まで企業さんとコラボしながらというのはなく、企業は企業、行政は行政としていた。こういった地方創生の中で話しをさせていただけるのはありがたいと思っている。

小野委員

送って頂いた資料を見て思ったことについて言いたい。前回の会議のときには、自分たちの地域に自信を持つことが大事だ、ということをお教わりしました。ずっと住み続けているとなにもかもが当たり前でよいところも悪いところもわからなくなってしまうということがあるのですが、この機会に今一度町民全体が客観的に自分の町を見直して、ここが自分の町の魅力だ、ここは欠点だということを見極めた上で、役場と町民とが一体になって進めていくことが大事だと思った。企業誘致に関して役場やプロのコーディネーターだけではなく、町民一人一人が自信をもって町のPRができるように、さっきの大台下駄ではないですが、大台下駄は日本一ですという発信ができるものをつくるのか、こういうことに関してはこの町もどこの市にも負けませんというような町民一人一人がPRできるようなものを創り出していくことが大事。

いただいた資料では、地域資源を活かした雇用づくりの中の大台タワーなどの細かい部分ですが、JR三瀬谷駅前にマンションをたてるという、まだ中間のものだということでも実現するかは別かと思うが、大台町内に車で通勤している人がどれだけいるのか、などを考えると……。車の本数がわずかなのに、JRの駅に直結することがそんなに大事かなとか、と考えてしまった。図書館をつくる、というのもあるが、読み聞かせの会をしている私から言わせてもらおうと、駅前にあるよりも、公園や憩いの場と一緒に郊外に建ててほしいなとも思う。

結婚へのきっかけづくりのところで思ったことがあって、今テレビとかでもお嫁さんを全国から探すというようなものもあるが、そういったものに乗っかるのも一つの手ではないか。全国に放送することによって、大台町というまちがここにある、こういう産業があって、ということ全国放送してくれるというのは、よい発信になるのではないかと考えた。それで、大台町へ多くの方に足を運んでいただいて、お見合いして一組でも二組でも結ばれる人がいればと思っている。

魅力と住みやすいまちを発信するという言葉ですが、転入者の相談窓口とかアドバイザーを設置したりなどについて、住環境の情報はもちろんだが、こういう仕事の斡旋ができますよとなると、転入後の生活を想像しやすくなるのではないかと。町内では求人を出しても集まらないという課題があげられていたが、町内の求人情報もそのときに一緒にだすと、想像してもらいやすいのではないかと。これも私の理想なのですが、転入者がきた時に、各

地区に移住者の身近に相談できるような「係」の人をいてもらうようにして、ちょっとした困りごとなどを相談できるようにするとか。「集落毎に説明書を作成する」とあるが、説明書を一方的にわたすだけではなく、困ったことがあったら相談できるような人にいていただくことで、転入者を応援していますよという姿勢が地域によって歓迎していますという姿勢が打ち出せるのではないかな。

ライフスタイルの子育てのところですが、見ていると、大台町は子育てする環境が整っていて、充実しているのを前提として考えているように見える。たしかに保育料は安いし、周辺の市町の比べると魅力的な点はいっぱいあると思っているが、これという目玉というか、例えば、小中学校の給食費を無料にするとか、第一子だけは保育料を無料にするとか、具体的なものがあるとわかりやすいと思う。医療費は何歳まで無料でしたっけ。

副町長

中学3年生までです。

小野委員

それを高校までにするとか。具体的に出すのはどうかな、と思った。

西村座長

ここまで細かい施策が出てくると、はっきり言うことができる。確定ではないですし、ぼくも相当だめだしをしました。だから、住民のみなさんからみてちょっとこれはというものについては、はっきり言った方がいいと思います。否定もするし、こうではなくて別の提案、前向きな意見もよくて、そういった点でかなり参考になったと思います。みなさんの中にだんだん共通項が見えてくる。最初におっしゃられた「誇りを持つことに気づいた」ということからみていくと、町をもっと知るべきだ、となるが、各地域でみなさん同じことを言っている。南伊勢町では「はばまい南伊勢」という本を出した。はばまいというのはまぶしいという意味。南伊勢町の商工会のひとつたちが、3年くらいかけてつくった。あそこは2つの町が合併したので、お互い知らないということもあるし、自分たちの部落毎のことしか知らない、ということもある。それぞれが自分たちの地域の自慢ものを集めてきて一冊の本にした。こういうのを、大台町の有志の会みたいなものを作って、取材しながらでも本をつくってしまうと、自分のまちということが自覚でき、それを今度は小学校とかでテキストとして大台町学として学ぶなどをする。桑名でもやろうか、と言っている。こういったことを地方創生の事業の一つとして、例えば3年間とか5年間とかかけて、小学生記者をつくるとかおばあちゃん記者をつくって、編集には商工会の若手やプロを入れてみてもいいかもしれないし、みんなで作る大台町の本のようなものは、みんなで町を知るいいきっかけになるのではないかな、と思っている。

移住者を支えるやり方については、別のことで気づいたのは、国際問題として第三者難

民受入というのがあるのですが、ある国からまず隣の国へ逃げて、最終的にはアメリカとかまた別の国へ逃げる、というのがある。日本はほとんど受け入れていない。それを唯一やっているのが鈴鹿なんです。そこで会議もしたことがあるのですが、スウェーデンの町から来た人なんかは、まさに仕事のあっせんから、誰が係になってこの家族を見る、などもある。大台町でも移住してもらいたいという数も決まってきているじゃないですか。そうになると何人くらいの係を用意したらよいか、とかイメージできるじゃないですか。具体的な感覚として、移住者コンシェルジュみたいな制度をつくって、仕事のあっせんからすべてある人が面倒をみて、各セクションへつないでいくということをする。もう一点は、来て頂く方々をあまり甘やかしてはいけないので、役割を与えることも重要。町の住民役割マップのようなものがあって、大台町は地域内連携でこういう雇用を守っている、この産業の中の、あなたはここの役割として来て頂く、というような公募をかけてもよいかも。まちな設計を住民みんなでやってみて、足りないところをよんでよというような人の誘致をしてもいいのではないかと。

阿部委員

一ヶ月前に津に赴任したばかり。三重県勤務もはじめて。大台町のことをよく知っていて愛している方々のなかに、なにも知らない人間が入ってきて気後れしておりますけれどもどうぞよろしく御願いたします。

具体的なことを申し上げることができませんが、座長のアドバイスもあったのでしようが、基本目標の整理がよくされていると感じた。というのも、普通行政がこういうものをつくると、やたらと項目の羅列が多くて、途中で見るのがいやになる場合が多いが、これはしっかり目標が整理されているというのは、この会議の活発な議論が土台となって、この四本柱ができていることは非常にいい、と率直に感じた。各論については、これだけすべてできるのか、ということもあるが、**できるだけしぼって、シンプルなほうがよい**と思う。シンプルな方が人に伝わると思っている。**実現の可能性のあるものを強調して、あとは夢を語る**というようにしてもよいのではないかと。

また、新聞メディアの協力ということもあったが、私の立場からお役に立てればと思いを申し上げます。地方創生でこういった資料、こういった目標を立てましたという情報が各自治体から出てきますけれども、こういったものをつくった、ということはあまりニュースにはならない。さきほどからのお話のように、地元産の下駄をつくるとか、こういうことは一つのニュースになる。その場合、ぼくらが考えると、こういった内容は新聞だと2段くらいかなと。次に、昴学園の生徒さんとコラボして作った、そうなるともう一つあがるな、3段くらいの記事になるなど。さらに、行政がかんでフランスに、となるとこれがたちまち、1面のニュースになったり、全国ニュースになって、地方紙だけではなく全国紙も飛びついてくるだろう。なにを言いたいかというと、創生会議でいかに具体化した内容をわかりやすく伝えられるかということが、メディアの立場からは重要なことである。こう

いった会議でいろんな人が集まってひとつのものを作り上げるということは、ストーリー性があって話題性がある、ニュース性が高いといえる。もうひとつ、行政の方もいらっしやるので、私の経験上、メディアを上手に使う自治体、宣伝上手な自治体というのがある、それは自治体の規模に関係なくて、町長とかトップがメディア発信を重要と考えているところは上手といえる。そういうところは発信力を高めるための職員の育成もしっかりしているので、総合戦略にも**メディア戦略**も書いて頂けるといいのではないかと。ただ資料投げ込んで、こういうのがありますよ、来てくださいではなくて、例えば移住者への施策を発表したら移住者の人が来ますよね。来てこの地でこういう生活をはじめました、こういう役割を担うようになりましたとか、フォローをして発信していただくと、いいのではないかと。発信力がついてくるとやがて、SNS などネットの力が非常に強いので、紙媒体としては危機を抱いているのですが、ネットに載って大台町があつという間に世界に広がりますから、そういったことも創生の一環として考えて頂ければと思います。

西村座長

メディアから見たときにどう見えるかということは、私たちがやっていることを、逆に言うと、ちゃんとやれているのか、という裏付けにもなる。また、ニュース性が増すと新聞の段も増えていくというのは非常にわかりやすく、マスコミの裏の考え方を知ったということで、逆に言うと町としてはこういったメディア戦略を考えていくことは重要かと思うし、田舎だからといって自分たちを小さく見せる必要はなくて、もっとしたたかにやっていると。したたかというのは悪く聞こえるかも知れないが、ぼくはいい言葉だと思っている。町がやっていることをしっかり伝えて、それが次に繋がるのであれば、マスコミにもきちんと取り上げていただけるのであれば、ストーリー性もきちんと仕組んでいく、過剰なことを言うのではなくて、やったことをしっかり伝えていくというところに、伝え方が悪くて伝わらなかったことを恥じに思うくらいにして、しっかり伝えていけば、自分たちのやっていることは世界のトップレベルだという自信を持っていけば、しっかり伝えるということは「したたか」だと思う。またシンプルに、ということはわかりやすいですね。今おっしゃられたことと同じことを、私はこの前のワーキングでダメ出しをいたしました。この議事録でその意味が伝わると思います。

野田委員

私は、3年前に移住してきた移住者の立場と、今の観光協会の職員としての立場があります。

移住者としての立場からでは、さきほど小野委員のおっしゃられた移住者のあとのフォローというところ、入ってきたときのフォローについて、この3年間を考えると、私は旦那さんと2人で入ってきたのですが、下真手地区については100点満点です。ついこの間も区長さんから「旦那さんとビアガーデンに来い」と言われて、ビアガーデンなんて

あったかなと思っていたら集会所だった。

観光協会の職員に地域おこし協力隊で木村さんという人がいて、その方も今下真手に住んでいるんですけど、木村さんも入ったから紹介の会をする、ということでした。下真手の全員が集まるわけではなくて、その集会所で朝ラジオ体操をしている老人の方々がいて、そしてその老人の方々を家のなかに閉じ込めるのではなく外へひっぱりだそうというおばちゃんたちの会で「下真手カフェ」という会があって、これらの人たちと私たちで、5時半から7時くらいまでの暗くなりかけの少しの時間でした。

その中で「困ったことはないか」とか「野菜つくっているのか、つくってないなら余ってるからあげるぞ」とか、そういうあったかさを下真手では感じていて、大台町の中でも（下真手はコンシェルジュの）モデル地域ではないかと思っている。他の地域には住んでいないのでわからないのですが、あいつ誰やとか、遅くに帰ってきてなにをしてるんだ、とか言われる地域もあるかもしれない。でも下真手はそういう雰囲気はなくて、すごくいい地域だと思っている。区長さんが本当に言い方で、コンシェルジュということを知って、下真手ではもう成り立っているなと感じている。

移住者として観光協会職員として全部含めて、5カ年の基本目標が整理されているところを見ると、観光という仕事は全部に関わるんだなと感じている。観光という言葉が出てるのが、基本目標3の方向性2のところが一番具体的に観光がはいっている。ライフスタイルも含めて全部観光が関わってくるのかなと思っている。さきほど呉山委員からこれを軸に産業をとされていたが、観光を軸に、というのも1つなのかなと思っている。コルクのことで観光も関わられるだろうし、観光からコルクにも関わられるだろうし。観光をするにあたって、わかりやすく物を売るというだけではなくて、私たちが今力をいれているのは観光サービスを売る、になっている。体験で町内に滞在していただいて、大台町のことを知って頂いて、外から大台町を好きになってもらうという人が増える、ということが観光の一つの役割かな、と思う。

ただ外からの人が大台町いいところだね、というだけなのも、ちょっと違うのかなと思うのは、この7月から観光協会のひとつの目玉としてアウトドアの遊びでSUPという新しいスポーツを展開している。すごく好評で、お客さんもたくさんは行って、その人たちは自然がすばらしいと言ってくれる。じゃあ、大台町の中の人々がSUPを知っている人が、観光協会がこういうことをしていることを知っている人が何人いるか。町内の人を巻き込んでやっているかと言ったら、そこまでの規模ではやりきれない。次の展開としては、私たちは、町内の方たちを巻き込んでの観光ができたらと考えている。これはまだ案で考えている最中のことだが、アウトドア・スポーツ・ツーリズムというのをキーワードにして、トレラン大会（トレイルランニング）をしたいと考えている。なぜかと言うと、「誇り」につながるから。

スポーツって本当にわかりやすくて、去年三重高校が甲子園で準優勝した。三重県民みんな応援しますよね。自分たちがちょっとはかかわっている高校の子どもたちなんだ、と

いうので誇りに思いますよね。

大台町にきてもったいないなと思っているのが、市町村対抗駅伝が最下位争いをしている。ちょっと力を入れると、全然違ってくると思っている。私は以前は豊田に住んでいて中学校の体育の教員をしていましたが、自分のクラスに豊田の中でナンバーワンになるような駅伝の得意な子がいました。その子がでる大会はクラスみんなで応援するんです。それが誇りで、クラスにとっての誇りで、豊田市が市町村対抗駅伝で一位になったらそれでうれしいし、すごくシンプルな誇りにつなげられるのかなと思っている。市町村対抗駅伝でなにかストーリーがつけられたらいいのではと思います。

さらにトレラン大会で町内の人に関わってつながっていけないかと思っている。500人、600人来る規模でお金をかけてちゃんと考えてやれば、500人の人が来る。そのためにはボランティアが100人単位でいる、宿泊施設が500、600人規模でいる。その時に今の宿泊施設では足りないから、臨時の民泊で対応しよう。臨時の民泊にするとおじいちゃんやおばあちゃんが1泊だけ選手たちを泊める。そうすると、トレラン大会におじいちゃんやおばあちゃんの思いが残る。お土産をつくっている人たちがトレラン大会のためにお土産をつくろうとなる。なにかひとつきっかけとなるものがあったら、町内全部から観光でやれないかな、と考えている。こんなふうに、アウトドア・スポーツからなにかできないかな、と思って勉強しているところです。それが内からの誇りにもなるし、外からの人たちの「いいところだったよ」という評価にもなるのではないかな。

西村座長

観光というのは光を見に来るんですよね。ということは、ここにいる人たちが楽しんでいないと意味がないので、移住してきた方々が地域の中に入り込んでいって、観光協会の仕事をしてしながら、いつのまにか地元住民より楽しんでいる。これが一番だと思う。そういう意味でいうと、是非ともそのトレラン大会はやったらどうですかね。

さきほどの呉山委員と同じで、**なにか一つ象徴的なものを一つ仕上げる**、それにむかっているいろんなことがそろわないですか。さっきのおじいちゃんやおばあちゃんも人が来るので家をきれいにしようとか。やる気がでてくるのではないかな。マスコミをどう動かそうか。それにあわせて婚活をするのに商工会をどう動かそうか、とか。こういったことのためにも、**一点抜けていい**んですよね。野田さんのおっしゃられるようにやりましょう。

もう一点は、移住者へのフォローというのはすばらしい。野田さんたちのことを徹底的に調べたらどうですか。ひとつだけ役場の方に苦言を呈すると、知らなさすぎると感じる。この作業をするときに、もっと住民の中にはいりこんで聞いて考えるという作業が必要ではないかな。この4つの基本目標が整理されて起承転結で見えているんですよ。項目もシンプルにわかるわけです。そうすると具体的施策となると事例があるはずなので、それを徹底的にそれを見切れば、野田さんたちを一週間みれば移住コンシェルジェがどういうものなのかがわかるはず。なるべくシンプルに考えるという阿部委員からの言葉を活用してい

くと、地域の中の事例、ないものを探しても仕方がないので、地域の中からすごい成功事例があるというのをもう一回掘り下げていくことでもいい町になるのではないか。

中条委員

第1回の会議の冒頭でも申し上げた記憶があるんですけども、銀行の立場ではなかなか新しいことを考えてくださいと言われるのは非常に不得手なんです。今回第3回になりまして、非常に具体的な施策の提示があり、そろそろ形が見えてきたと感じている。今までは個人的な見解などを申し上げてきましたが、ようやく銀行としてどのようにお役に立てるのか、というのが見えてきたと言える。

まず基本目標「魅力あるしごとづくり」のワーキング部会の作業方針を拝見して、きわめて簡潔かつ客観的に分析しているなど感心して読ませて頂いた。

行政としての関わりがあいまいである、人事異動による継続性の課題など、これらは大台町に限らず行政とはどうだったのかと、翻って我々のことを考えるとどうだったのかと思う。我々は民間企業ですので目標という名の下に極めて厳しい数字を背負って毎日過ごしている。当然、中長期で物事が考えられないという立場で仕事をしている。ただ、今まではそれでもよかった。行政もそれでよかったのかもしれません。なぜかという、すべてが右肩上がりだったから。黙っていてもレールに乗ってしまえば右肩のカーブを描いていた。これからは真逆のトレンド、右肩下がりの中で我々としても血も涙もないような数字を追っていただけで果たして良いのか、ということは気づいている。ここにありますように行政も気づいている。

我々民間企業としても継続的に、目先の数字に追われることなく、自分たちでものを考えてなにかつくっていかねばならないということに気づきはじめて、時を同じくして地方創生という流れになっている。

そういう意味でいうと、今まで行政とわれわれ金融機関はお金だけの関係であったが、これからはそれだけの時代ではない。産業課の方ともお話しをする機会があって、金融機関の窓口を行政機関の一つとして考えてくださいと。われわれの店舗は三重県・愛知県で百数十店舗あり、その情報というものがある。この情報は持っているだけでは「宝の持ち腐れ」なので、活用したい。その中核にいるのが金融機関で右のものと左のものをジョイントさせるのがわれわれの立場ですので、なにかものごとを考えられるときに、ちょっと銀行に聞いてみようかとか、なにか知らないだろうかとか、ということ行政の方にお持ちいただきたい。すべて回答できるかということについてはお約束しかねるが、そういう視点で考えていかねばならないと思っている。この地方創生を境に、もっと距離を近づきたい。せつかくこういった有意義なご意見を聞かせて頂いて、これから先運用がはじまったあとも、民間からの意見とか視点とかを吸収していただきたい。

ビジネスセンターとか情報センターとかこれら素晴らしいと思いますが、私どもにも声

をかけていただいて、情報提供させていただくことがあれば、と思っている。作業方針の最後に販路の拡大、海外も視野に入れるなどとなった場合も、私どもも海外の情報も持っておりますので、存分に利用していただきたいと思っている。

西村座長

こういうご進言がいいと思う。私たちも産学官連携をやっていると、もともと立場が違うのでなかなかかみ合わない。お互いが目標をもって一步一步近づき会うのが重要だ。銀行というのは、お金を預けたり、住宅ローンくらいに関わりかと思っていたが、銀行というのは地域の中に入り込んでいてものすごい情報網を持っている。逆にいえば発信網を持っているともいえる。銀行ではこういったこともやっているということがわかると、お互いに win-win の関係が組める。銀行に対する見方を変えるのも行政として重要なのではないか。自分たちがなにを持っているのか、をもっと開けっぴろげにして知り合って組めるところが組むことが大切。

右肩上がりのときは一人一人を考えればよかったが、これからは一人一人のものをどう組み合わせさせていって共働ということではなにかを生み出すようなことができれば。そうなる、一人一人が大事な時代になってきたと言える。成熟期である現在は、人が減っていくけど一人一人の密度が濃くなる、役割として。そういう意味では、一人一人が大事だし、地域の中の役割というものを明確にみんなで認め合っていくと動きやすくなってくるといような一人一人の密度の濃さが、町にある一つ一つの機関の密度の濃さというものが重要なのかなと思う。そういう意味では、銀行の役割もいまおっしゃっていただいたことをしっかり認識して、どう活用させていただくか、ということもこの施策の中に織り込んでいくということも重要ではないか。

上村委員

本日は代理出席で、第 1 回も出席させていただきました。今回はハローワークという立場とは別に、大台町を外からの住民の目ということでお話しをしたい。

私の住んでいるところも田舎で、大台町さんがここまでがんばっているけど、私の町は少し遅れているようです。私の家は兼業農家で、地域のみなさんも片手間で自分たちが食べる分くらいしかしていない。住んでいる人は高齢化で若い人が出て行くし、というところに住んでいます。親も高齢で、「私ももう農業もやめようか」と言うんですが、欲が出て、せめて親戚に配るくらいはということで、私たちが親の指導で一番いい農地で田植え稲刈りをして、水の管理などはできませんが。また親は少し野菜をつくっている。大台町にもお茶があるが、私のところも少ないですが全部手詰みでお茶をつくっていいいます。お茶も毎年やめようと、こんなえらいことはない、と思っているが、でもやっぱり欲が出て、茶工場は大台町に御願している。また家では大台のお水を買っています。よそと違うよう

な感じがしている。もうちょっと安いとありがたいなとは思っているが、木については、確か大台町には額縁やさんがあったと思うのですが、私も美術館が好きでまわっていますが、大台町の額縁やさんの額縁はすごいなと思っています。

農業をしているものからは、町からいろんなフォローをしていただいたら守っていけるのではないかと、思っている。お茶だったら、外国へ行ったらワインよりも高いものがあるようだ。お茶や水や木など資源に恵まれているので、町のバックアップが大切と感じる。それと、ローマ法王にお米を送った役場の方もいらっしゃると思いますので、そういった意味からもがんばってほしいと思う。

西村座長

ヒントはたくさん入れてらっしゃって、この地域にある農業があるが、しばった支援というのか、手揉みの話は大変興味深いと思った。ここでは大量生産でモノを量で売っていくのはまず無理でしょうから、むしろこだわったものをもっとこだわっていくというくらいのことをしていいのではないかと。それが結果的に値段に反映する。値段というのはこちらがつけなくてもお客さんがつけてくれることも結構あって、日本人は低めに付けるらしい。むこうにいくらならほしいか言わせてみると、実は倍や3倍で買ってくれるケースもあるかもしれない。それにはうしろにある「ものがたり」かもしれない。聞いてみると買いたくなる。やってきたことを、したたかに、はっきり伝えれば、それってすごい価値だけれども、自分たちがその価値を認識していないというか。きちんと伝えることで価値が伝わることもあるので、そういうこだわりのようなものを、この地域の農作物であれば、大台セレクションのようなかたちで皆が意識していくと、多品種小ロットのものでも、ひとつひとつが全部Aクラスの品質のものとして評価されるようになっておもしろいと思う。少ないことを武器にする。鈍くさいことを武器にする。それって今は認めてもらえる時代だ。日本に対して海外はそれを認めてくれる。

遠藤委員

農業では、やっぱり販売先がすごく大事で、道の駅とすると野菜が全然足りてなくて、作ってほしいということがあると思うが、ここの道の駅の特徴で、近くの市町の人しか出荷できないというルールがある。それはすごくいいところなんですけど、逆にせまい地域からしか集めていないと、どうしてもとれる時期ととれない時期がある。それを解消するためにハウス栽培などがあるが、ハウス栽培でもやっぱり同じものが同じ時期にとれるということがどうしても避けられない。お店からすると「ない」をすごく気にするが、生産者からすると「売れ残る、余る」ことがすごくショックで……。夏場では、夕方に行ってもなすやきゅうりが棚の端から端までであるとか、仕方ないですが、そうなる値段が下がってくるか、出さずに近所に配るとか。売れ残りを持ち帰るのもけっこういやな作業でつらい。生産する意欲も少なくなってしまう。販売先が道の駅だけではどうかというのが

ある。やはり人口の多いところに売り先があるので、流通しやすい方法があれば、と感じている。農家にもそれぞれ個性はあるが、あれつくってこれつくってというような指導をしてくれる人がいるようなシステムがあるとよい。

子育て関係ですが、公共料金の割引などもあるが、こういった割引があるから結婚するや子どもが生まれるということに結びつかないと思っていて、割引してもらうのはうれしいのだが、少し難しいのかなと思う。以前、企画課の岡本さんと話をしていたときに、女性でもいきいきと子育てや仕事をしていたら、そういう姿を見て、自分も子育てに取り組めるのではないかなと思うようになるのが理想では、とおっしゃっていて、本当にそう思う。

私も子どもがいて、大台町は子育てをしやすいところと思っていて、子供の人数少なくなってきましたけど、少ないと丁寧に見てもらっているなと思いますし、地域でも親戚でもないけれど近所のおばちゃんが声かけてくれたりとすごくあたたかい子育てのしやすいところだと思う。保育園の給食費は、保育料に込みだと思っていましたが、7~8年経って最近ようやく無料であることを知りました。他にも知らない人もいると思うので、もっとアピールしてもよいと思う。

西村座長

最初の農業の話ですが、農家の立場と買う人の立場では考え方が違うことがよくわかったし、本当は町全体で生産計画をたてて、作った物を適正な値段で買える仕組みがあるといいですね。

道の駅という売る場はつくったが、つくっただけで終わっている。今の時代であれば、もっときめ細やかにできるのではないかな。なすについていつだれがどのくらい植えたか、は調べてないですね。これが町全体でわかっていたら、いつくらいになすが出てきそうなどがわかりますよね。そうするとそれに向けて、道の駅だけではなく別のところにも流せるようにする仕組みをつくるなど。全部を把握しておくとなんでもできるのではないかな。それは農家の人、一人一人ではできないけれども。例えば、スマホに「今日は苗を何本植えた」を入力し、他の農家も同じように入力すれば、役場の人たちは全部把握できているようなシステムをつくる。それを見越して、道の駅なのか、あるいは、町の居酒屋さんに情報を流すとか。地域商社のようなところが、例えば、町の農作物全体を農業全体を、生産調整まではいかないけれども、販売と生産の調整を町ぐるみでできるような仕組みをやるうと思えばできなくはない。実はこういうことを私は今、JA とやろうとしている。今、鳥羽マルシェというところで考えているのは、農家はいつどのくらいのものをつくるかを決めてもらえば、いつくらいにどのくらいできるかは予想がつく。それができるのであれば、売る時期を少しずらしてもらおう、とか。こうなると農家同士で勝手に生産調整ができるようになるかもしれない。今やっているのは、買い取りの計画を全部たてるようにしている。いつどういうメニューをつくるから、なすがこれくらい買い入れる可能性がありますよと、全部ではないけれど、作る側と使う側のバランスがとれてくるようになる。

自動的にというのは、農家が見て自分の知恵と工夫で、今ここに植えたら安くなっちゃうから少しずつさそうとかができるようになる。行政としては、農家の努力をコントロールするような感じのことができれば。作る側と売る側の間にたって、バランスよくそれが流れるような仕組みをつくれなかなと思う。実際に富士通などもそういったことを作り始めている。IT を使えば両方の情報を集めてきて、その情報から、いつくらいになったら過剰になるので植える時期をずらすようになど自動的に調整できるような、農家が自分たちで工夫できるような仕組みができないわけではない。大台町ではまだ、売り場という道の駅だけになっているので、それ以外のやり方を町で仕組みをつくってもらおうと、もっとスムーズにいくよねという話です。

調整については、伊賀と組むのだっていい。大台町の道の駅は近隣しか使えませんよ、というのを変えていくというようになっていくのではないかな。伊賀の道の駅と大台町の道の駅で情報をやりとりするという。農家だけの努力ではできないことがはっきりしてきた。それを道の駅も認識すると、道の駅でできる工夫がでてくる。隣町と連携して、過不足ないように農家さんのあふれた生産物を融通しあうなど。

副町長

座長の言われているような仕組みは今考えていまして、外からほしいと言われているのは、大台町のようなきれいなところでつくった野菜を供給してくださいと言われているが、生産の足りない部分を補わなければいけないということで、多い物を出すのはいいのだが、足りないものを補うことが必要なので、道の駅直営の農場をつくるとか、なども進めている。

西村座長

農業では、農家さんの努力がきちっと値段に反映できればいいのだが、一番反映しにくいものである。であれば流通の方で、きちっとした仕組みをつくらないといけない。適正な価格で買える仕組みを作らないと農家は続かない。大台町は、道の駅などの仕組みをつくりながら、高い品質のものはそれなりの値段で買うよ、という仕組みをつくらないといけない。これも役割分担。すべて農家にすべきというのも無理なこと。農協が本来やるべきことなのかもしれないが、やりきれていない。行政の立場としてやっていくのもあってもいいのかなと思う。それがこの地域に仕事と雇用と健康をつくる、となる。

子育てでも、いろんな情報が伝わっていないなというところがあるので、ひとつのご意見として受け止めてほしい。

森山委員

資料を見させて頂いての感想からですが、非常に事業数が多いので、すべてするという事になればお金が足りないだろうと感じた。どの事業にしぼるかなどを見極めるのも難

しいかなと感じた。私は教育の立場で関わらせて頂いていて、その点では是非やっていた
だきたいと思っている。地域にどうしたら子どもたちが残るかということですが、土地も
愛し住民も愛するところ、これは教育が直結していく保証はないですが、やっぱり
やっていくべきだと思っている。そんな中で、大台学教材づくり事業がありますが、私も
過去昴学園に勤務させていただいた時に、平成 11 年から文科省の指定を受けて、環境ルネ
ッサンスという総合的な学習の時間を全国にさきがけて実施した。そのときのテーマが、
宮川村の森・水・人というもので、30 名ほどのゲストティーチャーが学校に登録して
いただき、わさびのことや額縁制作や流木磨きとか、地域のおじさんおばさんを含めて、宮川
にはすばらしい人材がたくさんいらっしゃいました。そんな中で宮川出身の子どもたちも
地元にはこんなにすばらしい人たちがいたんだ、こんなすばらしいところがあったんだ、
ということを発見できました。あまりにも地域を知らなさすぎる、ということは子どもに
も言えることでして、地域の方々の暖かみに触れながら成長することも大事かと思ひます。
小中高と一本通った大台学というものを地域の教材、人的資源や物的資源をフルに活かし
てできればいいなと思ひますので、小中高と行政とで連携してできればよい。その中で、
呉山委員からヒトとヒトとのコラボ創生ということで、昴学園にも触れて頂きましたが、
是非昴学園としてもこれからは、地域が元気になるためには、地域の企業や学校が元気にな
っていく必要があると思ひておりますので、しっかり考えていきたい。

西村座長

たぶん、教育機関が「鍵」なんですよね。ぼくは昴学園は鍵だと思ひている。昴学園が
この地域の次の世代をつくっていくし、呉山委員とのコラボでも、次の人材を作っていく
象徴的なものとして、小中高でいうと一番最後に教える場所だとしたら、ここが大台を一
番表現していく場所にならないといけないと思ひます。山を一番活用した産業を担う人たちを
ここでつくっていく、それが日本でもトップレベルの場所なんだ、という誇りが持てるよ
うなものがった高校になっていただくと、大台を象徴する学校になるのではないか。相賀高
校でも料理コンクールで賞をとると地域も応援していくんですよね。それと同じように昴
学園の子どもたちが木をつかった作品で世界大会で賞をとるようなことがあってもいいと
思ひます。三重大学としても協力させていただきますし、具体的なできることからやっていき
たいと思ひている。

最後に言いたいこととして、戦略は立てるだけではだめということ。実行しないと意味
がないので、今回施策も含めて細かいものもいっぱい書かれています、阿部委員からあ
ったようにシンプルにしていくことや、呉山委員からあったように、ひとつ完結させるよ
うな一点突破で実行していくというのも大事で、中日新聞の一面に載ることを 3 年後くら
いに実現するくらいにしていきたい。戦略としての整理はすごくよくなったし、アイ
デアだしも出てきている。住民のみなさんの意見もかなり聞いたので、あとは岡本さんの
腕の見せ所になるのでしょうか。シンプルにすばつとまとめていただくことを御願ひした

い。これらはワーキング部会だけではなく、推進本部で決めていくことになるかと思う。十分付託できると思う。みなさんご意見ありがとうございました。

副町長

ご意見ありがとうございました。この中から選択をしていくことになろうかと思えます。

辻本課長

本日はありがとうございました。もう一回会議があります。第4回会議では、最終案をお示ししてご意見をいただくのですが、とりまとめについては、事業等をしばって、実現可能なものについてとりまとめをおこないたいと思います。また最終案ができましたら、事前に配付させていただきたいと思います。本日はありがとうございました。